

アーザル・カイヴァーン学派の源流

——デリー・スルターン朝時代の 「古代イラン語彙」とウズワーリシュン——

青 木 健

1. 本稿の目的と問題の所在

本稿は、16世紀後半のイラン及び17世紀前半のインドで活動した「ゾロアスター教神秘主義学派」アーザル・カイヴァーン学派の源流の探求を目的とする。アーザル・カイヴァーン学派は、数の上では大きな思想集団を維持したとは言えず、アーザル・カイヴァーン (Āzar Kayvān, 1533～1618年) の在世当時でも、名前が判明しているメンバーはイランで16名、インドで17名である。彼らが残したペルシア語文献は44タイトルを数えるものの、現存するのは8冊に過ぎない。彼らの同時代的なインパクトを過大評価は出来ない。

しかし、筆者は、彼らは15～16世紀のモンゴル支配期イランと17世紀のムガル朝インドを繋ぐ思想的十字路口に居たと考えている。秘教的立場を堅持したアーザル・カイヴァーン学派の人数が限られていたのは当然である。寧ろ、層が薄い割には、ゾロアスター教徒、イスラーム教徒、ヒンドゥー教徒、ユダヤ教徒、キリスト教徒と多様な宗教的出自を包括している^①。彼らの人数に注目するのではなく、彼らの特徴を抽出することで、アーザル・カイヴァーン学派の中世イラン・インド思想史における立ち位置を見定めるべきである。その上で、彼らの源流や影響といった思想史的文脈を祖上に載せた方が、生産的な議論を展開できる。

筆者が本稿で言うアーザル・カイヴァーン学派の思想的特徴とは、①聖典の創出、②神秘主義思想の創出、③「古代イラン語彙」の創出の3点に集約される。本稿のテーマは③の源流だが、それに先立って

①と②の源流と影響についても、先行研究を参照しておこう。

1-1. 聖典の創出に関する先行研究

アーザル・カイヴァーン学派は、③の「古代イラン語彙」によって書かれた「古代イランの聖典」を思想の中核に据える。本書の匿名の著者は、アーザル・カイヴァーン本人と想定される。「古代イランの聖典」なる権威付けは明確にゾロアスター教の『アヴェスター (Avestā)』のコンセプトを継承しており、匿名の著者が『アヴェスター』の構成を熟知していたことは、キヤーヌーシュ・レザーニヤーによって立証された⁽²⁾。

同時に、中世イランに於ける新宗派フルーフイー派 (Hurūfīyah) の開祖ファズルッラー・アスタラーバーディー (Faḍl Allāh Astarābādī, 1394年没) の著作『ジャーヴィーダーン・ナーメ (Jāwīdān Nāme)』や、スクタヴィー派 (Nuqtavīyah)⁽³⁾の開祖マフムード・パスイーハーニー (Maḥmūd Paṣīkhānī, 1428年没) の著作『ミーザーン (Mīzān)』の影響も考えられる⁽⁴⁾。後者は、実際にアーザル・カイヴァーン学派の文献『ダベスターネ・マザーヘブ (Dabestān-e Mazāheb)』の「ワーヒド教の信仰箇条と信者たちに関する第9章」で引用されている⁽⁵⁾。アーザル・カイヴァーン学派がスクタヴィー派(彼らはワーヒド教 Wāḥidīyah と呼ぶ)の文献を熟知していた事実は動かない。

筆者は、この流れは、イラン思想史上、バーブ教のミールザー・アリー・モハンマド (Mīrzā ‘Alī Moḥammad, 1850年没) の『バヤーン (Bayān)』や、バハーイー教のミールザー・ホセイーン・アリー (Mīrzā Ḥoseyn ‘Alī, 1892年没) の『ケターベ・アクダス (Ketāb-e Aqdas)』の創出にまで影響していると予想している。しかし、各宗教は独自性を強調し、先行宗教からの影響を否定しがちなので、資料上、これらの聖典群がイラン思想史上で相互に関連していることを証明はできない。

1-2. 神秘主義思想の創出に関する先行研究

現在指摘されているアーザル・カイヴァーン学派の思想的源泉は、スフラワルディー (Shihāb al-Dīn Yahyā Suhrawardī, 1191年没) の照明哲学⁽⁶⁾とスクタヴィー派の秘教主義である。前者については、聖典『ダサーティール (*Dasātīr*)』の中にスフラワルディーのアラビア語祈禱文の近世ペルシア語訳が含まれていることによって、異論の余地なく証明された⁽⁷⁾。スクタヴィー派に関しては、文献上パラレル・パッセージを発見するには至っていない。

アーザル・カイヴァーン学派の後代への思想的影響については、殆ど研究がなされていない。17世紀以降のビハール州ジャウンプールは「インドのシーラーズ (Shirāz-e Hend)」と呼ばれ、ミール・フェンデレスキー (Mīr Fendereskī, 1640年没) の弟子モッラー・マフムード・ジャウンプーリー (Mollā Maḥmūd Jawnpūrī, 1651年没) を擁して、インド・イスラーム哲学の最盛期を現出した⁽⁸⁾。筆者はここに、ビハール州パトナーで栄えたアーザル・カイヴァーン学派の影響を想定できると考えているが、証明はされていない。

また、フルーフィー派やスクタヴィー派に由来する円環する時間論は、同時代史的にはオスマン帝国の思想家ニヤズイー・ムスリー (Niyāzī Mīsrī, 1694年没) などと並行関係にある⁽⁹⁾。しかし、両者を比較して、17世紀のオスマン帝国・サファヴィー朝・ムガル帝国に共通の思想的要素を探するような研究は、管見の及ぶ限りではなされていない。

1-3. 「古代イラン語彙」の創出に関する先行研究

『ダサーティール』の匿名の著者は、「古代イラン語彙」を以て本書本文を執筆し、これを「アースマーニー語 (*Zabān-e Āsmānī*)」と称した⁽¹⁰⁾。そのままでは解読不能なので、アラビア語語彙を排除した「純粹ペルシア語」とされる近世ペルシア語注釈が付されている。我々は、この純粹ペルシア語注釈によって、「アースマーニー語」本文の意味を了解し得る。

2020年までは、この人造古代イラン語彙は『ダサーティール』の匿名の著者、つまりアーザル・カイヴァーンによる創作だと見做されていた。ここから、「古代イラン語を人工的に創造し、それを以て古代イランの聖典を執筆し、そこに照明哲学と秘教主義を盛り込んだ」との超人的なアーザル・カイヴァーン評価が生まれた。

ダニエル・シェフィールドは、オスマン帝国の思想家ムフィー・ギュルシェニ (Muhyi Gülşeni, 1528 ~ 1604年) が人造言語バーレイバレン (Bäleybalen) 語の辞書を編纂している事実を重く見て、これがアーザル・カイヴァーンを触発したとする⁽¹¹⁾。オスマン帝国とサファヴィー朝・ムガル帝国を繋ぐ同時代的な思想史に着目する点では、極めてセンスの良い視点だと筆者は思った。だが、後述するように、人造古代イラン語彙の少なくとも一部は15世紀前半には成立していたので、これを全面的にバーレイバレン語の模倣だとするシェフィールド説には成立の余地がない。

2. 13～16世紀のペルシア語辞書の系譜と写本・刊本

以上のような研究の動向をふまえ、ここからは、人造古代イラン語彙の創出に焦点を絞って述べる。この研究に関するブレイクスルーは、アリー・アシュラフ・サーデギーによって果たされた。彼は、ローディー朝末期のインドで編集されたペルシア語辞書『ムアイイド・アル・フダラー (Mu'ayyid al-Fuḍalā)』(1519年編纂)の中に、『ダサーティール』で用いられた人造イラン語語彙が複数あることを指摘した⁽¹²⁾。1533年生まれのアーザル・カイヴァーンが創出した語彙が、1519年編纂の辞書に掲載される可能性は無い。つまり、人造古代イラン語彙の創出に関しては、アーザル・カイヴァーンには先駆者がおり、彼はそれを継承・発展させたに過ぎないと所論である。

だとすると、その創出者は誰なのか。個人名が把握できないとしても、いつの時代のどの地域の人物なのか。その人物はイランで活躍したのか、それともインドでか。このような問いが浮かぶものの、サー

デギーの研究は事実発掘的で、その検討の範囲は『ムアイド・アル・フダラー』の石版刷り1冊に留まる。本稿は、サーデギーの研究方法を拡大し、13世紀～16世紀のペルシア語辞書を幅広く検討することで、上記の問いに答えようとする試みである。

2-1. 13～16世紀のペルシア語辞書の概要

ペルシア語辞書編纂の黄金時代は16世紀～19世紀、その本場はインドと考えられており、これに先立つ13世紀～15世紀のペルシア語辞書編纂に関する研究の蓄積は少ない。インドでは1400年代に至るまで、重要なペルシア語辞書は編纂されていないとされる。インドでペルシア語辞書編纂が本格化するのはローディー朝時代(1451～1526年)以降である。また、インドのペルシア語辞書の中でも、デリー・スルターン朝時代のペルシア語辞書とムガル帝国期のペルシア語辞書は『ルガト (*Lughat*)』(語彙集)と『ファルハング (*Farhang*)』(辞書)で構造が違うとされ、前者に研究の焦点が当たることは少なかった⁽¹³⁾。

このような研究状況の下、13世紀～15世紀のペルシア語辞書に関する先行研究は、旧ソ連圏の方が豊富である。その理由の1つは、インド・ペルシア語の特質にある。デカン高原の歴史家フィリシュタ (*Hindū Shāh Firishta*, 1620年没)によれば、スィカンダル・ローディー(在位1489～1517年)の時代から、インド・ペルシア語ではイラン・ペルシア語より中央アジア・ペルシア語の文法や語彙が優勢になり、インド・ペルシア語文化はイランより中央アジアとの結び付きが強かった⁽¹⁴⁾。この為に、イランの研究者よりは旧ソ連圏中央アジアの研究者の方が、インド・ペルシア語文化への親和性が高かったのかもしれない。

本稿では、旧ソ連(出身はベラルーシ)のソロモン・バエフスキーの基礎研究を参照して議論を進める⁽¹⁵⁾。しかし、彼の基礎研究は15世紀末で終わっており、『ムアイド・アル・フダラー』まで及んでいない。それ以降の辞書情報に関しては、フダー及びブラシード・フサインで補った⁽¹⁶⁾。その結果得られたのが、次の表2-1である。①～⑩はバ

表2-1 13～16世紀のペルシア語辞書

編纂年	辞書の名称	編者	特徴
①13世紀末～14世紀初	『ファルハンゲ・ガッヴァース (Farhang-e Qawwās)』	ファフルッディーン・ムバーラク・シャー・ガッヴァース・ガズナヴィー (Fakhr al-Dīn Mubārak Shāh Qawwās Ghaznavī)	『シャー・ナーメ』読解用に編纂。アラビア語語彙を避け、ペルシア語語彙のみ収録。
②1342年	『ダストゥール・アル・アフアーズイル (Dastūr al-Afāzīl)』	デリー出身のハージブ・ラフィウ (Hājib Rafī' Dehlavī)	ペルシア語語彙のみならず、アラビア語語彙も含める。
③1405年	『ダーネシュナーメ・イエ・ガダル・ハーン (Dānesh Nāme-ye Qadar Khān)』	マールワー出身のアシュラフ・イブン・シャラフ・フォルギー (Ashraf ibn Sharaf Forūqī)	医学書解説用。マールワー・ゴール朝君主に献呈。アラビア語、ギリシア語、シリア語語彙を含む。
④1419年	『アダート・アル・フダラー (Ādāt al-Fuḍalā)』	ガーズイー・ハーン・デフラヴィー (Qādī Khān Badr Maḥmūd Dehlavī)	アラビア語やヒンディー語の同義語が豊富。
⑤1433年以前	『ザファーンゲーヤー (Farhang-e Zafāngūyā)』	バドルッディーン・エブラーヒーム (Badr al-Dīn Ebrāhīm)	インドで編纂され、後代の辞書に頻繁に引用される。
⑥1433年	『バフル・アル・ファザーイル (Baḥr al-Faḍā'il)』	ムハンマド・バルヒー (Moḥammad Balkhī)	インドで編纂された。
⑦1455年	『ウンマーン・アル・マアーニー (Unmān al-Ma'ānī)』	サイイド・イブラーヒーム・ムハンマド・バルヒー (Sayyid Ibrāhīm Moḥammad Balkhī)	アラビア語、ヘブライ語、パフラヴィー語、シリア語、トルコ語を収録。
⑧1468年	『ミフターフ・アル・フダラー (Miḥfāḥ al-Fuḍalā)』	マウラーナー・ムハンマド・シャーディー・アーバーディー (Maulānā Moḥammad Shādīābādī)	インドのマールワーで編纂された。
⑨1460年～1474年	『シャラフ・ナーメ・イエ・マネーリー (Sharaf Nāme-ye Manērī)』	ジャウンプール出身のエブラーヒーム・ガッヴァーム・ファールギー (Ebrāhīm Qawwām al-Dīn Fārūqī Bihārī)	インドのビハール州で編纂された。フェルドウスイー教団のシャファッディーン・マネーリーに献呈。

⑩1493年	『ムジュマル・アル・アジャム (<i>Mujmal al-'Ajam</i>)』	アースィム・シュアイブ (Āsim Shu‘ayb)	ベラルールのアリー・アクバル・ダーウード・ハーーンに献呈。
⑪1489年～1519年	『トゥッフアト・ル・サァーダート (<i>Tuḥfat al-Sa‘ādāt</i>)』／『ファルハンゲ・スイカンドリー (<i>Farhang-e Sikandarī</i>)』	マフムード・イブン・シャイフ・ズィヤー (Maḥmūd ibn Shaykh Ḍiyā)	スイカンダル・ローディールの宰相ハーージェギー・シャイフ・サイードウッディーンに献呈。
⑫1519年	『ムアイド・アル・フダラー (<i>Mu‘ayyid al-Fuḍalā</i>)』	モハンマド・イブン・ラード・デフラヴィー (Moḥammad ibn Lād Dehlavī)	アラビア語、ベルシア語、トルコ語の語彙をアルファベット順に並べた辞書。
⑬上記と同時代	『ミフターフ・アル・フダラー (<i>Miftāḥ al-Fuḍalā</i>)』	不明	古典ベルシア語詩に現れる稀少語彙の語彙集。
⑭16世紀半ば	『カシュフ・ッ・ルガト (<i>Kashf al-Lughat</i>)』	モハンマド・イブン・ラード・デフラヴィーの弟子のアブドゥッラヒーム・イブン・アフマド・スール・ビハーリー (‘Abd al-Raḥīm ibn Aḥmad Sūr Bihārī)	本書の価値は、史上初めて、アラビア語、ベルシア語、パフラヴィー語、トルコ語でスーフイズム関連の語彙を集め、これを解説した点にある。

エフスキーによる情報であり、⑪～⑭がフダーとラシード・フサインによる追加情報である。

ここに挙げた辞書は全てインドで編纂されている。筆者は、この時期のイランで編纂されたペルシア語辞書の情報に接することは出来なかった。したがって、本稿での議論はインドが舞台とならざるを得ない。イランの状況は資料が少ないために明らかにするのが難しく、上で提起した「イランかインドか」の問いには、現状では答えることが出来ない。

上記のデリー・スルターン朝時代のペルシア語辞書(⑭のみムガル帝国時代)が、ムガル帝国時代のペルシア語辞書の規範を提供する役割を担った。マウラーナー・シャイフ・イラーハーバード・ファイズィー (Maulānā Shaykh Ilāhābād Fayḍī ‘Alī Shēr Sirhindī) の『マダール・アル・アフアーイル (*Madār al-Afā’il*)』(1593年)、ミール・ジャマルッディ

ン・ホセイン・エンジュー・シーラーズィー (Mīr Jamāl al-Dīn Ḥoseyn Enjū Shīrāzī) の『ファルハンゲ・ジャハーンギーリー (*Farhang-e Jahāngīrī*)』 (1608年), アリー・ユースフ・シールワーニー (‘Alī Yūsuf Shīrwānī) の『ドゥッレ・ダリー (*Durr-e Darī*)』 (1609年), モハンマド・ガーセム・ソルーリー (Moḥammad Qāsem Sorūrī) の『ファルハンゲ・ソルーリー (*Farhang-e Sorūrī*)』 (1629年), モハンマド・ホセイン・ボルハーン・タブリーズィー (Moḥammad Ḥoseyn Borhān Tabrīzī) の『ボルハーネ・ガーテウ (*Borhān-e Qāte‘*)』 (1652年) などである。このうち、『ファルハンゲ・ジャハーンギーリー』がザンド語とパーザンド語⁽¹⁷⁾を収録し、ゾロアスター教系語彙に関心が高かった。『ボルハーネ・ガーテウ』は、アースマーニー語彙とウズワーリシュン (*uzwārīšn*)⁽¹⁸⁾も収録している。

2-2. 『ムアイイド・アル・フダラー』の情報源

こうした辞書群の状況の中からアーザル・カイヴァーン学派の源流を探るといふ本稿の目的に即せば、上記のデリー・スルターン朝時代の辞書群を時代順で全て検討する必要は無い。寧ろ、『ムアイイド・アル・フダラー』にまず注目し、その典拠になった順に遡及的に検討していった方が効果的である。

『ムアイイド・アル・フダラー』(表2-1⑫)の編者モハンマド・イブン・ラード・デフラヴィーは、序文に於いて自らの典拠について、下記のように述べている。

アラビア語については『スーラ』と『タージ』, ペルシア, ルーム, サマルカンド, 中央アジアの言語については、『リサーヌ・ツ・シュアラー (*Lisān al-Shu‘arā*)』, 『アーダート・アル・フダラー』(表2-1④), 『ダストゥール・アル・アフアーズィル』(表2-1②), 『ザファーンゲーヤー』(表2-1⑤), 『ムワイド・アル・ファワーイド (*Muwā‘id al-Fawā‘id*)』, 『シャルヘ・マフザヌ・ル・アスラール (*Sharḥ-e Makhzan al-Asrār*)』, 『ティッベ・ハカーイク・アル・アシュヤー (*Ṭibb-e Ḥaqā‘iq al-Ashyā‘*)』を参考にした⁽¹⁹⁾。

本書のラクナウ版校訂者によれば、モハンマド・イブン・ラード・デフラヴィーは特に『シャラフ・ナーメ・イエ・マネーリー』(以下、『シャラフ・ナーメ』と略記、表2-1⑨)と『クンヤト・ツ・ターリビーン(*Qunyat al-Tālibīn*)』を参考にしたという。更に、『ファルハング・スイカンダリー』(表2-1⑪)と『ムアイイド・アル・フダラー』(表2-1⑫)は、ローディー朝末期に『シャラフ・ナーメ』(表2-1⑨)を基礎に編纂されたともいう。

2-3. ペルシア語辞書編者の血縁と地縁

ここで言及されている諸辞書の相互のつながりについて、まず人脈的な面に着目すれば、⑤『ザファーンゲーヤー』の編者バドルッディーン・エブラーヒームの兄弟の孫が、⑨『シャラフ・ナーメ』を編纂したエブラーヒーム・ガッヴァーム・ファールーギーである。つまり両辞書は、編者が血縁関係で結ばれている。但し、⑤『ザファーンゲーヤー』はデカン高原北端部一帯のマールワーで編纂され、⑨『シャラフ・ナーメ』はインド北東部のビハール州で編纂されており、地理的には両者はかなり隔たっている。

また、⑫『ムアイイド・アル・フダラー』の編者モハンマド・イブン・ラード・デフラヴィーの弟子が、⑭『カシュフ・ツ・ルガト』を編集したアブドゥッラヒーム・イブン・アフマド・スール・ビハーリーである。この両辞書は、編者が直接の師弟関係で繋がっている。

更に、エブラーヒーム・ガッヴァーム・ファールーギーは、シャラフッディーン・マネーリーの崇拝者で、ビハール州のシャッターリー教団(Shattārī-Ferdowsīyah)の一員だった。アブドゥッラヒーム・イブン・アフマド・スール・ビハーリーもその名前から推察されるようにビハール州出身である。したがって、パートナーに移住したアーザル・カイヴァーン学派として⑨『シャラフ・ナーメ』の編者と⑭『カシュフ・ツ・ルガト』の編者が、ビハール州という地縁によって繋がる可能性が浮上する。

2-4. ペルシア語辞書の写本・刊本

だが、『ムアイイド・アル・フダラー』が典拠として挙げる内容は、筆者が把握した限りでの先行研究が挙げるペルシア語辞書と完全に一致はしない。ただし先行研究が挙げるペルシア語辞書にしても、筆者はその全てを参照できた訳ではない。上記の表2-1に即して写本・刊本の所在を説明すれば、以下のようになる。

- ①カルカッタに写本があるが、刊本は出版されていない。
- ②カルカッタに写本があるが、刊本は出版されていない。
- ③バクーに写本があるが、刊本は出版されていない。
- ④ロンドン、パリなどに複数の写本が存在しているが、刊本は出版されていない。
- ⑤1960年代まで写本は発見されていなかったが、その後、ホダーバフシュ図書館（パトナー写本）とタシケント大学図書館で相次いで見つかった。これらに依拠して、1974年にモスクワでバエフスキーが刊本を出版した。その後、第3の写本がテヘランの議会図書館で、第4の写本がベルリン＝マールブルク（ベルリンで発見された後でマールブルクに移管された）で発見された。1989年には、パトナー写本に依拠してナズィール・アフマドが刊本を出版した。
- ⑥15種類の写本が確認されているが、刊本は出版されていない。
- ⑦1824年書写のドウシャンベ写本、年代不明のロンドン写本があるが、刊本は出版されていない。
- ⑧16世紀に書写された写本が大英図書館にあるが、刊本は出版されていない。
- ⑨2006年にイランで2巻本の刊本が出版された。
- ⑩大英図書館のものが唯一の写本だが、刊本は出版されていない。
- ⑪情報なし。
- ⑫1883年9月にラクナウ、同年11月にカーンプールで2巻本の石版刷りが出版されている⁽²⁰⁾。また、イラン国会図書館に写本（写本

番号15019)がある。これ以外にも、1885年にカーンプールで2巻本の石版刷りが出版されたいが⁽²¹⁾、筆者は未見。

⑬情報なし。

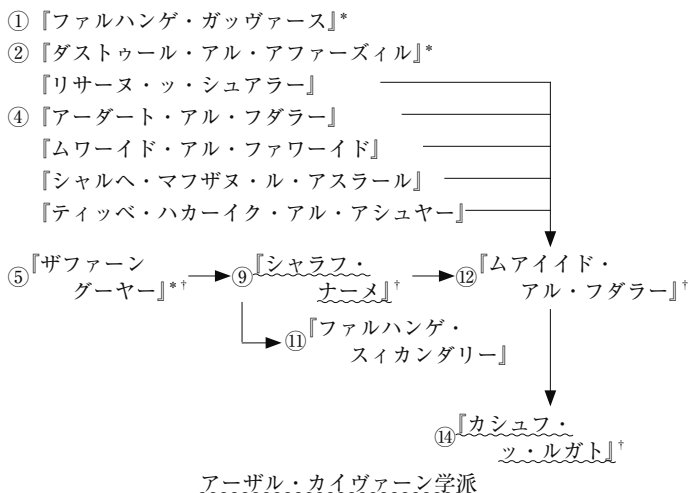
⑭1874年にラクナウで石版刷りが出版されている。

以上のうち、筆者が直接参照できたのは、⑤のモスクワ版刊本⁽²²⁾、⑨のイラン版刊本⁽²³⁾、⑫のラクナウ版石版刷り⁽²⁴⁾、⑫のイラン国会図書館写本⁽²⁵⁾、⑭のラクナウ版石版刷り⁽²⁶⁾の5つである。なお、これらの近世ペルシア語辞書の語順排列は独特で、まずは語頭の文字のアレフ・バー順に並び、次に語末の文字のアレフ・バー順が優先する。詩文を詠む際に韻を踏む必要から、このような排列になったものと思われる。

本来ならば、本稿の研究は全ての辞書を写本レベルで網羅するのが望ましい。だが、それは物理的に不可能なため、参照できた各写本と刊本の信頼性に関する筆者の判断を記しておく。⑤については、パトナー大学のサイイド・ハサンが専論を公表しており⁽²⁷⁾、これが正しいとするならば、底本の写本選定は信頼できる。⑨については、同刊本の *bīst-o yek* (21頁) から *sī-o se* (33頁) に合計9冊の写本を列挙しており、それぞれの書写年代を西暦に換算すると、(a)1852年、(b)1618年、(c)不明、(d)不明、(e)1820年、(f)1795年、(g)1659年、(h)1845年、(i)不明である。従って、厳密に言えば、(b)写本を活用した部分のみ、アースマーニー語混入の可能性を排除できる。⑫の石版刷りについては、どのような写本を校合した校訂版かは明記しておらず、信頼性に疑問符が付く。⑫の写本については、Webの写本データベースであるアーガー・ボゾルグでヒジュラ暦10世紀後半(=西暦1500年代後半)に書写されたとする本が存在し⁽²⁸⁾、これを信じるとするならば、アースマーニー語混入の可能性は排除できる。⑭の石版刷りについては、底本に関する情報がなく、信頼性に疑問符が付く。即ち、⑫の石版刷りと⑭の石版刷りに関しては、その情報を完全に信用するのは危険である。

以上を前提としつつ、研究を進める為に最低限必要な辞書の写本、

図：デリー・スルターン朝時代のペルシア語辞書の系譜



* = 古語に重点を置く辞書

† = 今回参照できた辞書

~~~~~ = ビハール州に所縁の辞書・集団

①, ②などの番号は, pp. 036-037の表に対応

即ち、『ムアイド・アル・フダラー』に至る情報伝達経路の幹線部分である『ザファーンゲヤー』と『シャラフ・ナーメ』はカバーできた。また、『ムアイド・アル・フダラー』から強い影響を受けたと想定される『カシュフ・ツ・ルガト』も一応はカバーできた。

それぞれの辞書の性格も重要である。古語の収録に重点を置いている辞書ほど、後のアースマーニー語彙を収録している可能性が高いし、医学文献解説用の辞書などの場合、その可能性はかなり低い。バエフスキーによれば、以下の辞書は、古語に重点を置いている。

- ① 『シャー・ナーメ』読解用で、ゾロアスター教神官ダストゥール・ローシャン・シャー (Dastūr Rōshan Shāh) に捧げられた。
- ② 序文で「パフラヴィー語も参考に……」と述べている。
- ⑤ 古典詩を読む為に、ゾロアスター教系の古語が重視された。7部

構成で、第1部と第3部では「パフラヴィー語とダリー語」を扱う。

以上の情報を纏めたのが、上記の図である。参照した辞書は充分ではないが、古語を重点化した辞書としての⑤『ザファーングーヤー』、⑫『ムアイド・アル・フダラー』に直結する辞書としての⑤『ザファーングーヤー』から⑨『シャラフ・ナーメ』へのつながりはとらえられる。最低限の吟味を施すのに必要な資料状況はクリアしていると、筆者は判断した。

### 3. 『ムアイド・アル・フダラー』における

#### 人造古代イラン語彙とウズワーリシュン

ここで検討を行おうとするデリー・スルターン朝時代のペルシア語辞書は、本来は『シャー・ナーメ』(1010年成立)やニザーミー・ガンジャヴィー(Nizāmī Ganjavī, 1141～1209年)などの古典詩文を読解する目的で編纂された。近世ペルシア語の揺籃期には、語彙や文法が変化したので、廃語が多く出たからである。『シャー・ナーメ』以前の近世ペルシア語の纏まった詩文は知られていないので、それらの古語・廃語を読解しようとするれば、ゾロアスター教系の伝統に依拠せざるを得ない。

『ムアイド・アル・フダラー』を検討したサーデギーによれば、この過程で、インドで編纂されたペルシア語辞書に、廃語以外の人造古代イラン語彙が混入した。その多くは『ダサーティール』で活用されたが、中には『ダサーティール』に収録されず、『ボルハーネ・ガーテウ』にのみ見られるものもある。

イランとインドに残存するゾロアスター教徒たちは、パフラヴィー語の伝統を維持していたので、ここからザンド語やパーザンド語を蒐集する余地が生まれた。近世ペルシア語辞書におけるザンド語・パーザンド語の流入過程を明確にした研究は、管見の及ぶ限り存在しないが、初出は『ボルハーネ・ガーテウ』と考えられてきた。一方、ウズ

ワーリシュンを初めて採録した辞書はサーデギーによれば『ムアイイド・アル・フダラー』とされる<sup>(29)</sup>。

つまり、ゾロアスター教や古代イラン文化の観点から見た場合、『ムアイイド・アル・フダラー』は後のアースマーニー語彙、それ以外の人造古代イラン語彙、ウズワーリシュンの収録の三重の意味で重要である。本節では、『ムアイイド・アル・フダラー』の文献としての価値を見定め、サーデギーの立論はどのような意味で妥当性を持つのかを検討する。

### 3-1. 人造古代イラン（アースマーニー）語彙のサンプル

サーデギー2020年論文は、『ムアイイド・アル・フダラー』（MFと略）、『ダサーティール』（DAと略）、『ボルハーネ・ガーテウ』（BQと略）に共通して見出される6つのアースマーニー語彙を、下記のように指摘している<sup>(30)</sup>。以下は、MF中における語義である。

- ・ ūchīzyān……「本質（Māhīyah）」の複数。
- ・ ahame……「バラバラになった」、「不完全な」。
- ・ pūdāt……「感覚される」。
- ・ chamrās……「アーヤ（Āyah：象徴）」。
- ・ farmand……「光の人間」、「清純な状態」。
- ・ hamād……「全て」。

なお、これ以外に、サーデギーがアーザル・カイヴァーン学派に先駆者が存在した決定的証拠として挙げるのが、『ダサーティール』特有の古代イラン預言者と思われていたメフ・アーバード（Meh Ābād）への言及が『ムアイイド・アル・フダラー』に見出せる点である。即ち、「アーバード派（Ābādiyān）：アーバード派とはメフ・アーバードの共同体を指し、彼はペルシアに遣わされた最初の預言者だった」との解説である。この立論が成立するならば、「古代イラン語彙」どころか思想内容にまで、アーザル・カイヴァーン学派の先駆者がいたことになる。

## 3-2. MF・BQにおける人造古代イラン語彙のサンプル

サーデギーは、『ムアイド・アル・フダラー』（MF）と『ボルハーネ・ガーテウ』（BQ）に見出せるが、『ダサーティール』（DA）にはない人造古代イラン語彙のサンプルを、以下の4つ挙げている。以下は、MF中における語義である。

- ・ tanbod……「全ての肉体」。tanはjism（肉体）で、ravanはnafs（靈魂）で、bodはhame（全て）やkull（全部）の意味である。
- ・ tahmūras……天球の理性的靈魂。
- ・ farīvar……正しい、真っ直ぐ。「ファリーヴァルディーン」や「ファリーヴァルキーシュ」で、「正しい宗教」や「正しい学派」。
- ・ pāsād……「保護」の意味で、風刺の言葉や下品な行為から自分自身を守る。

## 3-3. BQにおける人造古代イラン語彙のサンプル

サーデギーは、『ボルハーネ・ガーテウ』（BQ）に見出せるが、『ムアイド・ル・フダラー』（MF）と『ダサーティール』（DA）にはない人造古代イラン語彙のサンプルを、以下の7つ挙げている。以下は、BQ中における語義である。

- ・ pūlāb……「感覚」の意味で、pūlāb hessは「感覚や視覚で捉えられるもの」。
- ・ farbūd……正しい、真っ直ぐ。
- ・ fartāsh……無の反対の存在である。
- ・ farjād……偉人、賢者。
- ・ farūzān-far……「ファル・ファルーザーン」で、「人間の種の主」の意味である。
- ・ jahn……全体靈魂。
- ・ jayvād……「禁欲」で、つまり節制や欲望の減少である。

### 3-4. ウズワーリシュンのサンプル

ウズワーリシュン<sup>(31)</sup>に関しては、サーデギーは下記の10点の語彙を挙げ、『ムアイイド・アル・フダラー』が初出だとしている。

- ・ ūchat paman……「指」。手の指でも足の指でも。
- ・ ūdardan……「死ぬ」。
- ・ borūr……「兄弟」。
- ・ basaryā……「肉」。
- ・ bītā……「家」。
- ・ bīrbūshā……「遅れた思考」。
- ・ pātparāsh……「報復」や「応報」。
- ・ jalnā……「人間と動物の皮膚」。
- ・ chīchasat……「山」。
- ・ chīnūd……「真っ直ぐの橋」。

本稿では、検討する語彙はこれらに絞り、第4節では『ムアイイド・アル・フダラー』の2つのバージョンをチェックする。そのあと第5節で、先行する『ザファーンゲヤー』、『シャラフ・ナーメ』、後続する『カシュフ・ツ・ルガト』をチェックする。

## 4. 『ムアイイド・アル・フダラー』のラクナウ版

### 石版刷りとイラン国会図書館写本

今回の研究に当たっては、幸いにも『ムアイイド・アル・フダラー』の2つの異なるバージョンを入手できた。サーデギーが活用した底本不明のラクナウ版石版刷り（以下、MF (Lucknow) とも略記）と、サーデギーが参照していないイラン国会図書館写本（以下、MF (Tehran) とも略記）である。この両者を比較することで、サーデギーの所説を精緻化できるだろう。

下記が、アースマーニー語彙の有無をラクナウ版石版刷りとイラン国会図書館写本で比較した表である。辞書なので、その単語があるべき位置は確定しており、イラン国会図書館写本については、確認した



ページ数も記した。

表4-1 人造古代イラン（アースマーニー）語彙の比較

| 語彙         | MF(Lucknow) | MF(Tehran) |
|------------|-------------|------------|
| Ābādiyān * | ○           | p. 73に無し   |
| ūchīzyān   | ○           | p. 88に無し   |
| ahame      | ○           | p. 101に無し  |
| pūdāt      | ○           | p. 188にあり  |
| chamrās    | ○           | p. 303に無し  |
| farmand    | ○           | p. 578に無し  |
| hamād      | ○           | p. 827に無し  |

\* Ābādiyān（アーバード派）については、  
pp. 048-049での検討を参照。

表4-2 MF・BQにおける人造古代イラン語彙の比較

| 語彙         | MF(Lucknow) | MF(Tehran) |
|------------|-------------|------------|
| tanbod     | ○           | p. 243に無し  |
| tahmūras * | ○           | p. 244に無し  |
| farīvar    | ○           | p. 579に無し  |
| pāsād      | ○           | p. 191に無し  |

\* 英雄としてのタフムーラスではなく、流  
出論の知性体としてのタフムーラス。

表4-3 BQにおける人造古代イラン語彙の比較

| 語彙          | MF(Lucknow) | MF(Tehran) |
|-------------|-------------|------------|
| pūlāb       | ×           | p. 188に無し  |
| farbūd      | ×           | p. 578に無し  |
| fartāsh     | ×           | p. 581に無し  |
| farjād      | ×           | p. 578に無し  |
| farūzān-far | ×           | p. 579に無し  |
| jahn        | ×           | p. 279に無し  |
| jayvād      | ×           | p. 279に無し  |

表4-4 ウズワーリシュンの比較

| 語彙          | MF(Lucknow) | MF(Tehran) |
|-------------|-------------|------------|
| ūchat paman | ○           | p. 88に無し   |
| ūdardan     | ○           | p. 88に無し   |
| borūr       | ○           | p. 130にあり* |
| basaryā     | ○           | p. 110に無し  |
| bītā        | ○           | p. 111に無し  |
| bīrbūshā    | ○           | p. 111に無し  |
| pātparāsh   | ○           | p. 198に無し  |
| jalnā       | ○           | p. 274に無し  |
| chīchasat   | ○           | p. 276に無し  |
| chīnūd      | ○           | p. 279に無し  |

\*但し、ウズワーリシュンとして明示的に言及はされていない。

#### ラクナウ版石版刷りの信頼性

サーデギーがMF・DA・BQに共通していると指摘する人造古代イラン（アースマーニー）語彙6つのうち、イラン国会図書館写本では1つしか確認できなかった（表4-1）。サーデギーがMFとBQに共通とする人造古代イラン語彙4つのうち、イラン国会図書館写本では1つも確認できなかった（表4-2, 4-3）。サーデギーがMF中で確認したウズワーリシュン10のうち、イラン国会図書館写本では異論含みの語彙1つしか確認できなかった（表4-4）。

以上のデータから、筆者は以下のように推定する。ラクナウ版石版刷りは、『ムアイド・アル・フダラー』の原本に本来含まれていなかったアースマーニー語やそれ以外の人造古代イラン語彙や、ウズワーリシュンを、写本の書写経路か石版刷りの編集過程で収録したのではないか。これらの語彙のうちラクナウ版石版刷りで確認されるもののほとんどが、イラン国会図書館写本で確認されないとの事実は、この推定を強く支持する。

また、ラクナウ版石版刷りのアースマーニー語彙の中で唯一の纏まった文章である「アーバード派 (Ābādiyān)」の解説は、「メフ・アーバー

ドをアジャムに派遣された最初の預言者と認める人々」とある（なお、イラン国会図書館写本にはこの解説がない）。筆者が知る限り、アーザル・カイヴァーン学派は「（アラブ人本位の）アジャム」という言葉は用いず、「イーラーン」とか「パールス」と自称する。この部分は、『ボルハーネ・ガーテウ』vol. 1, p. 2<sup>(32)</sup>の解説と酷似しており、これを後から挿入した可能性がある。

このように、ラクナウ版石版刷りは同時代資料としての信頼性に欠けるため、これのみに依拠したサーデギーの立論は、見直されるべきだろう。しかし、サーデギーの問題提起自体は、見逃されるべきではない。僅かとは言え、間違いなく人造古代イラン語彙とウズワーリシュン（こちらは異論含み）が、イラン国会図書館写本にも見出されているのである。これらの語彙については、デリー・スルターン朝時代の他の辞書との脈絡の中で追究されるべきであろう。

## 5. 『ザファーングーヤー』と『シャラフ・ナーメ』と 『カシュフ・ツ・ルガト』

この段階で、『ムアイド・アル・フダラー』（MF）に先行する『ザファーングーヤー』（以下、ZGとも略記）と『シャラフ・ナーメ』（以下、SNとも略記）、及び後続する『カシュフ・ツ・ルガト』（以下、KLとも略記）との比較が必要になる。もし、僅かに確認された人造古代イラン語彙の系譜をZGとSNに遡及できれば、それらはZG・SNの年代以前に創出されたことになる。もし、ウズワーリシュンがZG・SNにも確認できれば、ゾロアスター教パフラヴィー語の正確な知識は、ZG・SN以前に知られていたことになる。もし、人造古代イラン語彙やウズワーリシュンがKLに確認できれば、それらはMFから採用された可能性が高い。

以下が、これらの3つの辞書の中に上記と同じ語彙を探った結果である。

表5-1 人造古代イラン（アースマーニー）語彙の比較

| 語彙       | ZG | SN | KL                |
|----------|----|----|-------------------|
| Ābādiyān | ×  | ×  | vol. 1, p. 88に無し  |
| ūchīzyān | ×  | ×  | vol. 1, p. 99に無し  |
| ahame    | ×  | ×  | vol. 1, p. 99に無し  |
| pūdāt    | ×  | ×  | vol. 1, p. 123に無し |
| chamrās  | ×  | ×  | vol. 1, p. 290に無し |
| farmand  | ×  | ×  | vol. 2, p. 84にあり  |
| hamād    | ×  | ×  | vol. 2, p. 387に無し |

表5-2 MF・BQにおける人造古代イラン語彙の比較

| 語彙       | ZG               | SN                       | KL                |
|----------|------------------|--------------------------|-------------------|
| tanbod   | ×                | p. 279にあり * <sup>1</sup> | vol. 1, p. 200に無し |
| tahmūras | × * <sup>2</sup> | ×                        | vol. 1, p. 212に無し |
| farīvar  | p. 79にあり         | ×                        | vol. 2, p. 87にあり  |
| pāsād    | ×                | ×                        | vol. 1, p. 129に無し |

\*1) 但し、語義は「静かさ」とされ、「肉体」の意味では取られていない。

\*2) 第5章p. 124に英雄としての言及あり。

表5-3 BQにおける人造古代イラン語彙の比較

| 語彙          | ZG | SN                       | KL                |
|-------------|----|--------------------------|-------------------|
| pūlāb       | ×  | ×                        | vol. 1, p. 121に無し |
| farbūd      | ×  | ×                        | vol. 2, p. 23に無し  |
| fartāsh     | ×  | ×                        | vol. 2, p. 91に無し  |
| farjād      | ×  | ×                        | vol. 2, p. 83に無し  |
| farūzān-far | ×  | ×                        | vol. 2, p. 87に無し  |
| jahn        | ×  | p. 334にあり * <sup>3</sup> | vol. 1, p. 306にあり |
| jayvād      | ×  | ×                        | vol. 1, p. 283に無し |

\*但し、語義は「アフラスィヤープの息子」とされ、「全体靈魂」の意味ではない。

表5-4 ウズワーリシユンの比較

| 語彙          | ZG | SN | KL |
|-------------|----|----|----|
| ūchat paman | ×  | ×  | ×  |
| ūdardan     | ×  | ×  | ×  |
| borūr       | ×  | ×  | ×  |
| basaryā     | ×  | ×  | ×  |
| bītā        | ×  | ×  | ×  |
| bīrbūshā    | ×  | ×  | ×  |
| pātparāsh   | ×  | ×  | ×  |
| jalnā       | ×  | ×  | ×  |
| chīchasat   | ×  | ×  | ×  |
| chīnūd      | ×  | ×  | ×  |

ZG, SN, MF (Lucknow), MF (Tehran), KL の分析

上記の分析結果をまとめたものが表5-5である。ZG, SN, MF (Lucknow), MF (Tehran), KL の 5 つの辞書のうち、筆者が資料的価値は低いと判断した MF (Lucknow) 以外で、人造古代イラン語彙やウズワーリシユンが見出されたのは、下記の 6 例である。この中で(?)を付した語については、筆者はこれが「人造古代イラン語彙」として提示されているとの確信を持ってなかったので、敢えて疑問符を付けた。

表5-5の分析結果から(1)～(6)それぞれの語について考察すると以下の通りになる。

- (1)pūdātは、DAで初出と考えられてきた人造古代イラン語彙である。これがMF (Tehran)に見出された以上、1519年以前にインド・ビハール州で実在した語彙だと考えられる。
- (2)farmandは、KLで初出の人造古代イラン語彙である。16世紀半ばのインド・ビハール州で実在した語彙で、1533年生まれのアーザル・カイヴァーンが創出した可能性はない。
- (3)tanbodは、SNで言及される語彙だが、DAとは別の語義で使われている。1474年以前のインド・ビハール州で、このような語彙があったとの参考事例に留めたい。
- (4)farīvarは、最も古くZGで言及されており、1433年以前のマール

表5-5 ZG, SN, MF (Lucknow), MF (Tehran), KL の古代イラン語彙

| 語彙      | ZG | SN    | MF(Lucknow) | MF(Tehran) | KL |
|---------|----|-------|-------------|------------|----|
| pūdāt   | ×  | ×     | ○           | ○          | ×  |
| farmand | ×  | ×     | ○           | ×          | ○  |
| tanbod  | ×  | ○ (?) | ○           | ×          | ×  |
| farīvar | ○  | ×     | ○           | ×          | ○  |
| jahn    | ×  | ○ (?) | ×           | ×          | ○  |
| borūr   | —— | ——    | ○           | ○ (?)      | —— |

ワーで通用していた可能性がある。この語は、「パフラヴィー語とダリー語」の章で挙げられており、編者は古語として採録している。KLにも再録されているので、後代の混入では無いだろう。

(5)jahn は、SNで言及される語彙だが、DAとは別の語義で使われている。1474年以前のインド・ビハール州で、このような語彙があったとの参考事例に留めたい。

(6)borūr は、MF (Tehran) に見出されるが、ウズワーリシュンとしての解説ではない。

## 6. 結論：200年間のタイムラグと超普遍的・

### 魔術的「古代言語」の創出

本稿は、16世紀後半のイランと17世紀初頭のインドで活躍したアーザル・カイヴァーンによる（とされた）人造古代イラン語彙に関する先行研究の検討から出発した。従来の多くの研究は、筆者のものも含めて、これをサファヴィー朝・ムガル帝国の文化史の文脈で捉えてきた。しかし、サーデギーは、『ムアイド・アル・フダラー』のラクナウ版石版刷り1点を検討し、人造古代イラン語彙（少なくともその一部分）とゾロアスター教パフラヴィー語ウズワーリシュンは、1519年以前のローディー朝インドで普及していたとする論を提起した。

これに対して本稿では、検討するペルシア語辞書を4冊に拡大し、『ムアイド・アル・フダラー』については石板刷りの他にイラン国会図書館写本も併用して、サーデギーの所論の精緻化を目指した。その

結果、サーデギーの結論に反して、大部分の人造古代イラン語彙は1519年のインドで一般的だったとは言えないとの結論に達した。逆に一部の人造古代イラン語彙は、1519年よりも更に遡って、1433年以前のマールワー、或いは1474年以前のビハール州で流通していたと判明した。この事実は、一部の人造古代イラン語彙の作成年代を、1400年代前半まで引き上げる。ウズワーリシュンについては、筆者はサーデギーの主張を補強する材料を見つけられなかった。こちらは、17世紀中期の『ボルハーネ・ガーテウ』が初出と判断せざるを得ない。

以上の検討から、人造古代イラン語彙とウズワーリシュンの時期的変遷をある程度まで確定できる。即ち、1400年代前半のマールワーでは、早くも数種類の人造古代イラン語彙が流通していた。この場合、問題なのは、人造古代イラン語彙の数（それは時代を下れば増加する性質のものである）ではなく、そのような語彙を創出しようとの発想自体である。現時点では、1400年代前半のマールワーを以て中世イラン・インド文化史の一つの画期と見たい。しかし、ゾロアスター教パフラヴィー語のウズワーリシュンに関する知識は、1600年代半ばのデカン高原が初出である。ここに、人造古代イラン語彙の創出とゾロアスター教パフラヴィー語の正確な知識の流通の間に、200年以上の乖離を確認できる。

筆者は、この200年のタイムラグに大きな意義を見出している。いわば、理想化された「古代イラン語彙」のアイデアが、現実のゾロアスター教パフラヴィー語の知識に先行したのである。このタイムラグの存在が正しければ、「古代イラン語彙」を構想した人物／集団は、必ずしもゾロアスター教神官であることを前提としない。寧ろ、伝統的ゾロアスター教とは離れた地点から、全く独自に、人工的な古代イラン語彙を構築した人々だったと考えられる。

同時に、彼らはイスラーム教徒でもあり得ないことも指摘しておきたい。イスマール派やフルフィー派が如何に異端宗派であれ、イスラーム教徒である以上、聖典は超越の神が下したアラビア語の『ク

ルアーン』に限定される。アラビア語以外の別の古代語で書かれた聖典という概念は、イスラームとは完全に背馳する。同じことは、ユダヤ教徒に対しても言える。ユダヤ教徒にとって「白い火の上に黒い火で書かれた言語」は、ヘブライ語以外ではあり得ないだろう。

敢えて思想史上で類似の現象を求めるなら、バベルの塔以前のアダムの言語を復元しようと試みたヨーロッパ・キリスト教世界の思想家たちが該当するが<sup>(33)</sup>、14世紀のイタリアの思想家と15世紀前半のインド（またはイラン）の思想家の間に具体的な影響関係は想定し難いだろう。思想史的観点からの本研究の意義は、中世のヨーロッパ・キリスト教世界とインド・イラン世界で、同時多発的にそのような発想が出現したことを指摘した点にある。アラビア語というイスラームの普遍言語に覆われた15世紀前半のインドまたはイランで、古代イラン語彙を人工的に創出し、これにアラビア語を凌ぐ超普遍的且つ魔術的言語としての地位を与えようとした思想家たちは、いまだ謎に覆われた存在であるとは言え、確かに実在していたのである。

本稿は、基本的には事実関係の整序に過ぎない。思想研究としては、人造古代イラン語彙を構想した人物／集団の思考の復元が最終目的となる。15世紀以前に、ゾロアスター教パフラヴィー語に関する正確な知識を欠きつつ人造古代イラン語彙の生成を主導したのは何者なのか。ZGに確認された人造古代イラン語彙は、イランから流入したのか。それともインドで生成されたのか。これらの解明に伴って、アーザル・カイヴァーン学派の評価に関しても、新たな思想的枠組みを提供できるであろう。古代イラン語を人工的に創出した思想家たちと、それによって新たな預言を語ったアーザル・カイヴァーン学派の研究は、ワンセットの議論である。その解明のために現状で可能な研究手法は、1300年前後にゾロアスター教神官の助力を得て編纂された『ファルハンゲ・ガッヴァース』に至るまでのペルシア語辞書を精査し、更に時代を遡及して事実関係を積み重ねていくしかない。



## 註

- (1) 彼らの内部資料『ダベスターネ・マザーヘブ』によれば、アーザル・カイヴァーンの学識と神秘主義への造詣が、多くの宗教の信者を惹き付けたとされる。この多宗教の混淆状況には、ムガル朝インドというバックグラウンドも大いに寄与したと考えられる。
- (2) Kianoosh Rezaia, “Did Āzar Kaivānīs Know Zoroastrian Middle Persian Sources?” *Entangled Religions (Ruhr-Universität Bochum)*, Herausgegeben von Kianoosh Rezaia und Reza Pourjavady, 13.5, 2022. (<https://er.ceres.rub.de/index.php/ER/article/view/8895>)
- (3) スクタヴィー派とは、マフムード・パシーハーニーによって創出されたオカルト学の体系を指す。円環する時間論や輪廻転生説が思想的柱とされ、イスマーイール派やフルーフィー派の影響が指摘されている。
- (4) Takeshi Aoki, “The Dasāfir and the “Āzar Kaivān school” in Historical Context: Origin and Later Development,” *Entangled Religions (Ruhr-Universität Bochum)*, Herausgegeben von Kianoosh Rezaia und Reza Pourjavady, 13.5, 2022. (<https://er.ceres.rub.de/index.php/ER/article/view/9625>)
- (5) 青木健, 「アーザル・カイヴァーン学派研究3」, 『東京大学東洋文化研究所紀要』, 169, 2016年, pp. 184–197。
- (6) 照明哲学とは、スフラワルディーがアリストテレス哲学を批判し、自己認識を認識論の基礎に据えた哲学体系を指す。西アジア・中央アジアの思想界では、アリストテレス哲学と並ぶ哲学体系として知られた。英語や日本語では、「東方神智学」との意識もある。
- (7) Łukasz Piątak, “Between Philosophy, Mysticism and Magic: A Critical Edition of Occult Writings of and Attributed to Shihāb al-Dīn al-Suhrawardī (1156–1191),” PhD thesis, Warsaw University, 2018.
- (8) Sajjad Rizvi, “Mīr Dāmād in India: Islamic Philosophical Traditions and the Problem of Creation,” *Journal of the American Oriental Society*, Vol. 131, No. 1, 2011, pp. 9–23.
- (9) 真殿琴子, 「オスマン朝期スーフィズム思想に見られる円環に関する考察

——ニヤーズイー・ムスリーの『デヴリーイエ論考』を中心に——, 『イスラム世界研究』, 14, 2021年, pp. 209–227.

- (10) この語彙に関して、パシュトゥー語やバルーチ語といった同時代の東方イラン語方言が起源となった可能性は、自称『古代聖典』の神聖言語である点を考慮すると、かなり低い。他の起源候補はゾロアスター教ダリー語だが、J. S. Sorūshyān, *Farhang-e Behdīnān*, Tehrān, 1956を参照する限り、同一語彙は見出せなかった。
- (11) Daniel Sheffield, “The Language of Heaven in Safavid Iran: Speech and Cosmology in the Thought of Azar Kayvan and his Followers,” *No Tapping around Philology: A Festschrift in Honor of Wheeler McIntosh Thackston Jr.’s 70th Birthday*, ed. Alireza Korangy and Daniel J. Sheffield, Wiesbaden: Harrassowitz, 2014, pp. 161–184.
- (12) ‘Alī Ašraf Šādeghī, “Āyā hama-ye Loġāt-e Dasātīrī barsāḡta-ye peyrovān-e Āzar Kaivān ast?” *Journal of Iranian Studies*, Vol. XVI, Osaka University, 2020, pp. 96–100 (アリーアシュラフ・サーデギー, 「『ダサーティール』に見られる造語は全てアーザル・ケイヴァーン学派によるものなのか」として, 『イラン研究』16号に近世ペルシア語で掲載)。
- (13) Dilorom Karomat, “Turki and Hindavi in the World of Persian: 14th and 15th Century Dictionaries,” *After Timur Left*, eds. Francesca Orsini and Samira Sheikh, Oxford University Press, 2014, pp. 130–165.
- (14) M. J. Borah, “The Nature of the Persian Language written and spoken in India during the 13th and 14th centuries,” *The Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol. 7, Part 2, 1934, pp. 325–327.
- (15) S. I. Baevskii, *Early Persian Lexicography: Farhangs of the 11th to the 15th Centuries*, Global Orient, 2007.
- (16) M. Z. Huda, “Pre-Mughal Persian Lexicographers of the Indo-Pak Subcontinent,” *Journal of the Asiatic Society of Pakistan*, vol. 13, 1968, pp. 27–47, S. Rashid Husain, “Persian Lexicons during the 16th Century AD in India,” *Islamic Culture (Hyderabad)*, vol. 53, 1979, pp. 99–122.

- (17) パーザンド語とは、通常は書物パフラヴィー文字で表記するゾロアスター教パフラヴィー語を、敢えてアヴェスター文字で表記した特殊な形態のパフラヴィー語のことである。
- (18) ゾロアスター教パフラヴィー語に於けるウズワーリシュンとは、アラム語の綴りをパフラヴィー語として訓読みする特殊な文法上の決まりごとを指す。
- (19) イラン国会図書館写本15019のp. 2。
- (20) 書誌情報を詳しく見ると、上巻がラクナウ、下巻がカーンプルで出版されているが、サーデギーは一括してラクナウ版とする。本稿でも両者をラクナウ版として扱う。
- (21) Maryam Shāyegān, “Naqd-e Chāp-e Hend-e Farhang-e Mu’ayyid al-Fuḍalā (Fuṣūl-e Fārsī),” *Nashrīye ye Dāneshkade-ye Adabīyāt va ‘Ulūm-e Ensānī-ye Dāneshgāh-e Shahīd Bāhonar-e Kermān*, 86/3/26, 2007 (<https://ensani.ir/fa/article/13141/%D9%86%D9%82%D8%AF-%DA%86%D8%A7%D9%BE-%D8%B3%D9%86-%DA%AF%DB%8C-%D9%81%D8%B1%D9%87%D9%86%DA%AF-%D9%85%D9%88%DB%8C%D8%AF%D8%A7%D9%84%D9%81%D8%B6%D9%84%D8%A7-%D9%81%D8%B5%D9%88%D9%84-%D8%B9%D8%B1%D8%A8%D-B%8C-%D9%88-%D8%AA%D8%B1%DA%A9%DB%8C->).
- (22) Badr-al-Dīn Ebrāhīm, *Farhang-e Zafāngūyā wa Jahānpūyā*, ed. S. I. Baevskii (facsimile, text, translation, index), Moscow, 1974.
- (23) *Sharaf-nāme-ye Manyarī yā Farhang-e Ebrāhīmī*, ed. Hakima Dabiran, Tehrān: Pazhūheshgāh-e ‘Ulūm-e Ensānī va Moṭāla’āt-e Farhang, 2006.
- (24) プリンストン大学からブックローンして頂いた。記して感謝したい。
- (25) この写本の存在については、ボーフム大学のキヤーヌーシュ・レザーニャー教授からご教授頂いた。記して感謝したい。
- (26) コロンビア大学からブックローンして頂いた。記して感謝したい。
- (27) Sayyid Ḥasan, “Ek qadīm Farhang Zafāngūyā,” *Fikr va Nazar*, Aligarh, 1962, p. 3.
- (28) 下記のURLを参照。

<https://aghabozorg.ketab.ir/BookSearchByTitle?BookTitle=%D9%85%D9%88%D9%8A%D8%AF+%D8%A7%D9%84%D9%81%D8%B6%D9%84%D8%A7&pageId=1>

- (29) 前掲註(12)Sādeghī, p.99, ll.3–4を参照。
- (30) サーデギーが確認できたMF-DA-BQ 共通語彙は、この6つである。筆者も、これ以上の共通語彙を見出せなかったので、本稿ではこの6語彙に依拠して話を進める。
- (31) 近世ペルシア語の文脈でのウズワーリシュン（近世ペルシア語ではホズヴァーレシュ）については、解説が必要である。例えば、第1の例として挙げたūchat pamanについて、BQにはこうある。

‘wcht pmnはūchat pamanと発音する。ザンド語・パーザンド語で、実際にはangosht [指] を意味する。angosht-e pā [足の指] もangosht-e dast [手の指] もあり得る。

つまり、近世ペルシア語でも、アラブ・ペルシア文字で‘wcht pmnと綴り、これをūchat pamanと発音しながら、実際にはangoshtを意味するという形態でのウズワーリシュンは知られていた。本節の問題は、それがBQ以前に遡り得るかである。

- (32) Muḥammad Ḥusayn ibn Khalaf Tabrīzī, *Borhān-e Qāte’*, Tehrān, 5 vols, 1963.
- (33) ウンベルト・エーコ, 『完全言語の探求』, 上村忠男・廣石正和 (訳), 平凡社, 1995年。

【附記】 本稿でのペルシア語のカタカナ転写は、現代イラン・ペルシア語方式とF. Steingassのインド・ペルシア語方式が混在している。これは、本稿の守備範囲がイランとインドの両方に互るためで、ご寛恕頂きたい。

(静岡文化芸術大学 教授)

The Origin of the Āzar Kayvān School: The Artificial Ancient Iranian  
Vocabulary and Zoroastrian Pahlavi Uzwārišn in the Delhi Sultanate India

AOKI Takeshi

This is a study devoted to the origin of the school of Āzar Kayvān (d. 1618), the legendary medieval Irano-Indian sage to whom numerous works on ancient Iranian sacred book(s), ancient Iranian vocabulary, and Persian Sufism were attributed. Among those diverse fields, this article is an *étude* into relatively uncharted territories: the creation of “ancient Iranian vocabulary” and understanding of Zoroastrian Pahlavi Uzwārišn (Aramaic heterograms).

Scholars who were already familiar with the Āzar Kayvān school thought that their “ancient Iranian vocabulary” was formed by Āzar Kayvān himself in Safavid Iran in the late 16th century or Mughal India in the early 17th century. But in 2020 a study by Šādeghī argued that there were indeed some distinctively clear precedent cases of “ancient Iranian vocabulary” and Zoroastrian Pahlavi Uzwārišn in a Persian dictionary edited in Bihar, India in 1519. If so, it seems safe to say that a large-scale acceptance of ancient Iranian culture and falsification of “ancient Iranian vocabulary” took place in northern India at the end of the Lodi dynasty.

Indeed, however, the direct evidence of Šādeghī is one lithograph of a Persian dictionary. In this paper, the author aims to refine Šādeghī’s points by comparing and examining other manuscripts of the same Persian dictionary, two preceding Persian dictionaries, and one Persian dictionary immediately following it.

As a result, it was found that the lithograph used by Šādeghī contained artificial ancient Iranian vocabulary and Uzwārišn that were not found in earlier manuscripts, indicating that it may have been added by later generations. The acceptance of ancient Iranian culture and falsification of “ancient Iranian vocabulary” at the end of the Lodi dynasty should be denied. However, it has been confirmed at the same time that some artificial ancient Iranian vocabu-

lary dates back to the Persian dictionary of the early Sayyid dynasty. If this is the case, it can be determined that the origin of this artificial ancient Iranian vocabulary dates back to at least the early 1400s. It was also confirmed that the knowledge of *Uzwārišn* was reflected in the Persian dictionary 200 years later, during the Mughal Empire. The reception of ancient Iranian culture and lexical forgery in medieval India is a cultural phenomenon that spans a considerable time span.